

西洋紀聞の初稿断片—— 「零本ヨハンバツテイスタ物語」

宮崎 道生

西洋紀聞が近世學術史上、きはめて高い地位を

占めることは改めて言ふまでもない。ところが本書は、内にキリシタン関係の記事を多分に含むため、采覧異言とは異つて嚴秘に附され、周知の通り、一部の孝者の固でひそかに謄写され尊重されただけで——寛政年間、命により幕府に献上したことを例外として——、明治十五年に刊本の出現を見るまでは、一般人の眼にふれることがなかった。かやうに嚴秘に附せられたことが一つの原因でもあらうが、白石自筆の清書本を今日に伝へてゐて、安心して其のすぐれた内容に接することが出来るわけで、史的役割においては遙かに大きかった采覧異言が、自筆本を伝へないために諸本の照合といふ煩瑣な手続を必要とするのとは対蹠的

である。

紀聞の成立については、嘗て詳しく考証したことがあり、新井白石の研究、その際、原稿と認めるべきヨハンバツテイスタ物語の存在を明かにし、本書とその物語との関係についても一通りの考察を加へたのであつたが、今問題とする白石自筆の「零本ヨハンバツテイスタ物語」(筆者假拵)については、その存在を簡単に解説して、「これは初稿本(ヨハンバツテイスタ物語の)と見なしてよいのではあるまいか」と述べたのみで、ひいてはこれが西洋紀聞の原初形態を示すものであることを実証するまでには至らなかつた。爾来、諸般の事情に妨げられて、該零本の全貌を紹介しえな

いまま今日に及んだ次才であるが、断片的なもの

ながら自筆本と認められるだけに（表紙裏、両面の写真、参考）、珍重に値するものと思ふのである。以下に其の全文を掲げてヨハンバツテイスタ物語との比較を試みると共に、執筆の時期、内容等について解明し得たところを申し述べて見よう。

一 零本とヨハンバツテイスタ物語との比較

ヨハンバツテイスタ物語の存在は、去る三十年の秋に鮎沢信太郎教授が「新井白石のヨハンバツテイスタ物語」といふ題名の下に、解説を附して紹介されたところで（歴史教育、幾つかの徴証を以て此の物語（以下略）が西洋紀聞と深密な関係にあり、従つて白石の著書で、紀聞の初稿本とも見なすべきであるとせられたのであるが、その考証の正確精密であるにも拘りず、その紹介された写本は遺憾ながら故栗田元次教授蔵本のまた写して、善本といへないものであつた（それは一読して直ちに判ること、隨所に誤りや文意不明の箇所

がある）。それに比べると該零本は、まぎれもなく自筆本と認められるだけに、物語の場合のごとき廻りくどい証明を必要としないわけであるが、一面、全くの草本であるため判読に苦しむ箇所が少なからずある。本文を掲げるに先立ち形態について一言すると、既に旧著の解説において述べた通り、本書は「詩経図総目」と合綴され「題箋には「附采覧異言」とある」（写真参考）、僅か三丁半に過ぎないもので、物語が「ロウマン乃事」、「諸国の事」、「政羅巴国々大乱の事」の三章から成るのに対し、本書は「ロウマン乃事」の一章の而も約半分を収めるに過ぎない。そこで以下而書に対比的にかかげ、異同出入の実態を示すこととしたい。前述の通り、鮎沢本は栗田本のまた写しであるから、ここでは栗田本に基く筆者自身の写本に拠り、不備の点を鮎沢本によって補なふこととする。（解説不能の箇所や誤読の部分については識者の御教示を得たい）（句読点は筆者）

(物語) ロウマン万事

一ヨワンバツテイスタシロウテヨハシロウテ
 是其がいほく。凡^ソ地^キをわかちて六大州とす
 とは大地の勢^イの円なる事。一ツに欧羅巴^{エウロパ}は
 てまりのこことくなるをいふ。二ツに利未^{リウイ}
 本朝^{ホンチャウ}に於ては奥^ウ南番^{ナンパン}といふ地方なり。三ツに利未^{リウイ}
 欧羅巴よりバ。南に三ツに垂^ア細^{シヨ}垂^ア等の地方なり。四ツに南^{ナン}垂^ア
 羅巴^{ロバ}の東^{トウ}地^チの^ノ上^ノ画^{ガク}といふ陽^{ヨウ}かことし。四ツに南^{ナン}垂^ア
 利^リ加^カ五ツに北^{ペキ}垂^ア墨^{モク}利^リ加^カ六ツに墨^{モク}瓦^ワ腓^{フイ}泥^ニ加^カ
 也^ヤ。陰^{イン}とていふ。陽^{ヨウ}の地^チ下^カにふかことし。地方といふ
 其欧羅巴の地方ジユテヤに。サントスマリヤと
 いへる女子あり。じる^ユヤ^ヤ支^シ那^ナといふは如^コ德^{トク}とい
 はんがごとし。サントスマリヤ。尊^{ソウ}も人^{ニン}に如^コす。利
 サントバマリヤといふ。我國は是^{コノ}世^セに十六歳の時に及
 びて其夢に示^シウス其子と生れて。エイズスキリ
 マトスといふべしと見て示^シウス技^ギ能^ネなれば天^{テン}詩^シ
 書^{ショ}に上^{カミ}帝^{テイ}といふ事^{コト}のごとし。エイズスキリス
 夫^{コノ}スの音^{オン}の転^{テン}せし我國にてエイウスといひ。エイ
 夫^{コノ}事^{コト}もキリストスの転^{テン}せし又^{マタ}キリヤとあつゝに男
 女の道にあづからずして執^{シツ}性^{セイ}なきベレンといふ
 所にして。一人の男子をうむ。夢見し所により

て一人の男子をうむ。夢みし所によりて、これをエイス、キリストスと名づく。按ずるに、エハ
是歳乙丑の年より十代崇神天皇に及ぶといふ。
是らば本朝の年より十代崇神天皇三十年辛酉の歳
に皇初、漢平帝元始二年のあたれ。此時本朝
義氏より二万戸減後、十九年かのち、雲日に。エ
イス、兒たりしより、あつから称して天主の子、
一世世界の主也といひて、十二歳より始めて此教を
人に示し、三十歳の時時にシユデヤの都セルサ
レンといふ所にして、日々に其法を説く事三年
衆を生まれてあつから稱して天上天下唯我独尊
と稱するの口なるい。尊大、其教をうくるものす
てに五千人、ここにあらてある人、かれが妖邪
の法と偽竊の罪なる事をのみから称して、一世
世界の王ビイザル狂のに告しかば、その罪を
断りてカルワリヨといふ山にしてこれを磔にす
その柱を彼に十字架といふ、死してのち三日
に及びて蘇生し、その田に見へ、その諸弟子の
ために法を説く事四十日、そのうちシナヘとい
ふ山の頂より上天せり。時にその年三十三、
墨氏賊のいゆるに、林を以て其身を貫き立て、以て標

て。これをエイス、キリストスと名づく。按ずる
に、エハ是歳乙丑の年より十代崇神天皇に及ぶ
といふ。是らば本朝の年より十代崇神天皇三十年
辛酉の歳に皇初、漢平帝元始二年のあたれ。此
時本朝義氏より二万戸減後、十九年かのち、雲
日に。エイス、兒たりし時。自ら称して天主の
子。一世世界の主なりといひて、十二歳より。
始めて教を人に示し。三十歳の時よりシユデヤ
の都セルサレンといふ所にして日々に其法を説
く事三年衆を生まれてあつから稱して天上天下
唯我独尊と稱するの口なるい。尊大、其教をう
くるものすてに五千人。ある人其説を排て妖邪
と稱するの口なるい。尊大、其教をうくるものす
て。反逆として、一世世界の王を称するが故に、
其国乃主セルサル狂のに告しかば、其罪を断り
て、カルワリヨといふ山にしてこれを磔にす。其
柱を彼に十字架といふ。死してのち三日に及
て。蘇生し其田に見て。其諸弟子のために法を
説く事四十日。そのうちシナヘといふ山の頂
より天に上れり。時にその年三十三、其諸の事
を以て、墨氏賊のいゆるに、林を以て其身を貫
き立て、以て標とす。其血の十月に。本を以て
其身を貫き立て、以て標とす。其血の十月に。
一、代皇仁天皇の六十二年癸巳の歳。後漢光武
帝十

見てす。その血、地に流る。大豊雪氏といひてこれを
その血を取きて泥を以てこれを固めて、[□]の器に
中にいれをきして、十月にしてこれを又人となれ
代りといふ説に相通し。○按ずるに、此事本朝十建
武天皇に天皇六十三年、癸巳の歳、後漢光武建
武九年にあ。その母マリヤは六十三歳にして上
天せり。其子殺されし時、四十八歳といふ。さち十
五年を経へて死。その従弟子凡七十二人、その中
十二の大弟子あり。その十二人中、サントス
ペイトルスといひしは、これホンテヘキスマキ
ス・イムスの始祖たり。サントスとは尊称也。按ずる
に、^{キス}朝叔氏のオ一祖の事のことし。ホントヘ
キスマキス・イムスとは、その法の師オ一の人の
号な。そのヘイトルスも亦イタリヤのロウマン
にて殺されしより、其墓の地は國なり。ロウマに
事下に、凡三百廿年間、その法の師なるもの
の^{三十二世迄}こと／＼に誅せられしもの三十二世^①は
法をウキスマキス・イムスの。その三十三世、シル
ペステレといふか時に及んでシルペステレとモ
いふ。皆くその、イタリヤの主ヘコウス抹殺ン
タンチイノといひしか、コウス・タンとモいふ。コ
ウスはち王癩病を患ひしに、多くの小兒を殺して
その血に浴しなは疾癒へしといふものゝありし

建武九年にあ。其母マリヤは。六十三歳にして上
天せり。子殺されし時に四十八歳。そののち十
五年を経へて死。其徒およそ七十二人。其中十二
の大弟子あり。其十二人中。サントス・ペイト
ルスといひしハ。これホンテヘキスマキス・イム
スの始祖たり。サントスといふは尊称なり。名はペイト
ルと稱す。ホントヘキスマキス・イムスの人の号也。
そのペイトルスもまたイタリヤのロウマンにて
殺されしより、都の地は國の轄下に見へたり。
凡三百廿年間。ホンテヘキスマキス・イムスに
るもの。三十二世までこと／＼に皆誅せらる
。其三十三世シルペステレといふか時に及て。
イタリヤの主ロウス・タンチイノといひしか癩病
を患ひしに。多くの小兒を殺して。其血をもて
浴せば。疾癒べしといふものゝありしに。我が
疾を患ふるがために。いかで罪なきものを殺す
へぎとて用ゐず。其夜。夢に二人の神人來りて
天主^{テウス}汝の心をあはれめて。われ二人を降し給へ
り。シルペステンといふ師。此所にかくれゐた
り。汝かれに達ふ事を得はその疾は愈べしといふ

に、我が疾を患ふるかために、いかて罪なきものを殺す事やあるべきとて用ゐす。その夜、二人の神人來りて、天主汝のこゝろをあはれみて我二人を降し給へり、シルベステレといふ師、此国にかくれゐたり、汝かれがあふ事を得てその疾癒へしといふと見えて、かの師のもとに尋ねゆく。^⑥（その師シルベステレ水をもて一鉢殺す）その師水をもてその頂に灌ぎしかば、その疾たち所に癒ぬ。期師はなれど被殺をうくる頂に灌ぐの罪を赦除するの義なりといふ。たゞいして、これ孰に相頂し。王大きに悦び、やがてその国をもてその師に施し、一ツの伽藍をたて、^{（コンスタンチンイノハウテリヨと名づけその都の地を以てその師に施し一鉢殺す）}コンスタンチンイノハウテリヨと名づけ其身は數百里を隔てうつりす。^{（代々本朝天皇の御初年にあたる東晉元ロ およそ、その国の四面ことく石を以て基とす。その田、十八里と見えたる人の説に、その石垣の幅三十餘里の二里にあたるの世里餘にあたる八里といふ、その中ハツの山ありツアリてその地勢險固の山地あり。その殿堂樓閣、一千三百八十餘年の今}

と見て、彼師のもとにたづねりき。かの師。水をもてその頂に灌しかば。その疾たちところに癒ぬ。凡そは水をもて彼其頂に灌ぐもの。是ハエ。其師除くの義也といふ。たゞいして、これ孰に相頂し。王大きに悦び、其地を以て其師に施し、^{（今この地也）}一ツの伽藍をたてこれをコンスタンチンイノハウテリヨの伽藍と名づけ。其身數百里を隔てうつりす。其地を以て其師に施し、^{（代々本朝天皇の御初年にあたる東晉元ロ およそ、その国の四面ことく石を以て基とす。その田、十八里と見えたる人の説に、その石垣の幅三十餘里の二里にあたるの世里餘にあたる八里といふ、その中ハツの山ありツアリてその地勢險固の山地あり。その殿堂樓閣、一千三百八十餘年の今}

に至る迄、つゐに火災^{といふ事}を経ずして、代々に金銀珠玉をもて修し飾りしかば、その莊嚴いふはかりなし。シルヘゼテレ始て此地に住せしより今の（ホンテヘキスマキスムスー抹殺）キレイメンス^{ホシヘキスマキスムス}に至る迄。凡二百四十餘世に及へり。

○これより歐羅巴北方の國く、國王（大臣抹殺）

より始て（その國中の人民抹殺）皆その法を

信受奉行せしといふ事なし。今の大清の天子

も。ヒツのマルカリイタを以て。施入せらる

珠^{加蓋}カに太なる^{加蓋}珠をいひ。その口（註、

前文「およそ、その國の四面」云々へ続く）

その事^{その事}摩竭提國の施沙王、竹林園を以て事^{ことし}

按するに、彼國の法へに教りるに「抹殺」番

語いたこと／＼くに（詳なる「抹殺」すへ

からされは、その詳なる事をはしらす。但し

その法すなはち西天の仏氏より出し（所なる

「抹殺」事はうたかふからす。その法に

天堂あり、地獄あり、像ありてこれにつかへ

（または「抹殺」灌頂（の法「抹殺」あり、

て修し飾りしかば。その莊嚴いふはかりなし。シルヘゼテレ始て此地に住せしより今のキレイメンス略に至るまで。ホンテヘキスマキスムス凡ソ二百四十四世に及へり^{加蓋}。○本朝天皇の比^{ホシヘキスマキスムス}おひ。枝那^{ホシヘキスマキスムス}に東晉元帝の初年に^{ホシヘキスマキスムス}あはるべし。

一其法を奉ずる師弟子の位号は、云々（此條、零本欠）一後掲文Ⅰ、参看。

一凡そ其法の学ぶ所も多かり、云々（零本欠）一後掲文Ⅱ、参看。

一一世界のうちにして各その奉ずる所の法あり、云々（零本欠、但し左記に該当する註は別）一

後掲文Ⅲ、参看。

按するに。彼國の法。番語いまだこと／＼に通せされば。その詳なる事をはしらす。但しその法は。すなはち西天の仏氏より出し事はうたがふべからず。其法に。天堂あり^{加蓋}。地獄あり。像ありてこれにつかへ。灌頂あり^{加蓋}。咒文あり。念珠あり又その教主の始を設事。多くは仏氏の説に合ふ事あり。又アエイエスとは。周孔の道のごとくなるをさし

呪文あり、念珠あり、法衣あり。またその教主の始をとく事、なを仏氏の吾周孔の道を排し斥くる事のことし。

以上の比較において知られるやうに、零本と物語との相違として才一に挙げるべきは、物語の方に振假名が多く附せられてゐるのに対し、零本にはそれがないこと、才二には割註の部分において相互に繁簡の差と出入があり、且つ一に止まるが割註の位置に相違があること、才三に零本の方は抹殺や書加へ等があつて、物語よりも一層草本としての形態をとどめてゐること等であらう。すなはち、才一の物語の方に付せられた振假名は、例へば、欧羅巴・天主・釈迦文・妖妄・蘇生等であり、才二の割註の繁簡の例としては、零本①（その血地に流る、云々）が物語よりはるかに詳細

名づけ。宋儒のいわゆる理學のごときをコンフウシヨスと名づけてこれを排き斥くる事。なを仏氏の周孔の道を排き斥くる事のことし。

一凡ソ一世界の人主の位をわかつに（零本欠）——後掲文Ⅳ、参看。

一凡ソ一世界の国々の品をわかつに（零本欠）——後掲文Ⅴ、参看。

であること、出入の例としては、④・⑤のごとき零本にあつて物語にないもの、③のごとく物語にあつて零本にないものがあり、さらに割註の位置の異同には⑥と⑦との関係のごときがある。才三の零本における抹殺や書加へは、前者の例としては⑧（天に上れり）⑨（その師シルベステレ水をもて）⑩（コンスタンタイノハウテステリヨと名つけ云々）等があり、また後者の代表例は、終りの方に見える「これより欧羅巴北方の国く……（割註）その殊ことに大なるもの也口」がそれである。なほ、用語や表現上の相違の例としては、「聖女」と「女子」へ上か零本、この方が西洋紀

聞の用語と同一である）、「本朝、釈氏の才一祖の事のことし」（零本）と「その法の師才一の人号也」のごときがある。そのほか、零本が冒頭に西洋人を冠したり、天竺とすべきを震旦と誤記してゐることなどもあり、いかにも初稿草本らしい姿を示してゐる。

ついでに、比較表中、「後掲文」として省略した五ヶ條の文章をここに附載しよう。（カッコハ内は鮎沢本の記載）

Ⅰ其法を奉ずる師弟子の位号は才一に（ハハ）ホンテヘキスマキスイムス。又はこれをペアハともいふ。此位にあるもの。一世界のうちにたゞ一人是テウスエイズのかみしろなれば。凡此此法をうくる国々の国王宰官を始めとして。これにつかふる事皆々テウスのごとし（釈迦文経のまひも。皆々かれへ皆々かひ）につかふるは番夷の位（ハハ）オニ。カルデナアリヌ。此位にあるもの七十二人（弟子）に進ずるがやにおよそホンテヘキスマキシムスの位を補する事ハ。此七十二人の中をもて撰ふ也。およそ此法の徒弟（

弟子）等集りて。かの位たるべきものゝ名を。おの／＼紙にしるしてこれを封じ。テウスエイズスの像の前にて披しその名をしるせし数の多きをもて定むる也（此の事のゆゑ）。才三はエツピスコツピス。これより下ハ定まれる数もなし。其次はテアウネトル。其次はテヤウコマス。其次は。スッフデヤウコマス。其次にはマギストル。これらの職掌（ジヤンシヤウ）の名号もまた数多し。悉く（悉く）に挙げべからず。某がつかさどる所はメツシヨナアリウス。アブストウリクス。これ（也）ハメツシヨナアリウス（に）使すペアテレ（ン）に事ハあべられんとイルマンなどいふは。其位号にはあらず。西洋のことはに父をペアテレ（ン）。母をマアテレ（ン）兄弟をイルマンといふ。されば我たつとむものをば。ペアテレといひ。我したしぎものをば。イルマンといふ。此故に其師をはペアテレ（ン）。其友をはイルマンといひしにや（もの也）といふ。西洋の雅言（ザン）をラテンといふが其餘といふⅡ凡そ其法の学ぶ所も多かり。いわゆるガラアマテイカ。アリットメ引テイカ。レトリカ。ヒ

これテウスエイヌスの命し給ふ所也との義なりといふ。

V 凡そ一世界の国々の品をわかつに。これに彼國の所な才一。ロウマン。其國すこしき也といへども万国の上たる事。なを預はすこしきなれども。身軀の上たる事のことし。これ天主の國なる故也。尊大に播種^{（が）}の倍にはなむべし才ニ。ゼルマニヤ。其國の大きな事。万国のうちにたくなべくもなし。

才三。ヤアポン村より始て日本地をかし西洋ノ國に來る。支那の人の音をモてジボンといふ。國に本といふ事を其國の音をモてジボンといふ。を聞て彼人ジヤボンとよぶ。これ支那の音の転せしめしがるをまたラフデ。これ支那の音の転なり。今も我々をいふはニヤデモンにヤボンといふと義なり。を和蘭。和蘭の人の語のことし。

よそ一世界は東より始れり。その始れる所の國にして其國は少しき也といへとも。其人物〔其物〕も風俗も万国の中にすくれしか故也。

ナイナ等を始として。其他の國くは皆これにく好^{（が）}の音なり。

果かれに問ふに。支那莫卧兒等國^②の。我國に

つく争いかにやといふに。支那。其國大なりといへともその人物いかでヤアボンにはおよぶべき。これを物にたとふるに支那は。方なる物を見るがごとし。ヤアポンは円なる物を見るがごとし。一又支那は堅^{（かた）}ものを見るがごとし。ヤアポンは和なる物を見るがごとし。一

支那の人の塞^{（さ）}る所ある事。いかでかヤアポンの人の通する所あるに及ぶべき。もしその地の大小をモていはゞ支那莫卧兒をのく世界の中の大國にてヤアボンのおよぶべきにあらうといふ。

二 零本執筆の時期

前節において明かになつた通り、零本は物語より以前の述作で、現存のものとしては最初の稿本と認むべきものであるが、さうとすれば該本の執

筆は何時のことであつたらうか。その執筆時としては一先づシドナ取調直後、やや後、かなり隔つた時期等、幾つかが想定され得るが、才一のシドナ取調直後といふ推定は、文中に「是歳乙丑の年より」云々とあるのが一根據となるが、他の例から考へても、事件の発生時と執筆年時とは必ずしも一致しない場合があるから（此の場合はシドナの物語は乙丑、実は己丑―宝永六年のことである）、むしろ次に述べる徴証の方を重視すべきものと思ふ。その徴証とは、すなはちローマの説明をした劃註の一節、「フランド人の説には山ヒツありて」云々である。すでに旧著で詳しく申し述べた通り、白石のシドナとの会談は、宝永六年十一月十二月の四回にわたる取調べの際のみならず、シドナが小石川のキリシタン屋敷に囚禁の身となつた後においても行はれたのであり、而して今問題となるオランダ人との会談は、正徳二年二月二十七日・三月五日・同四年三月三日・享保元年二月二十七日と、これまた四回にわたつて行なはれてゐる。幸ひ才一・才二両回の会談については

白石自身のメモが遺存してゐるので、このメモが会談の際の話題をきれなく収載してゐるものと假定する時には、右の記事はこれらのメモ中には見えないから、才三回目の正徳四年三月三日以後に獲得した知識と見るべきことになる。すなはち、ローマについての記事としては、メモには

「ロウマ廻廿四里斗、寺の外ハ多ハ細工人也。此所の細工、天下に双なし。諸国の人々も学むに行也。○本主をパウスと云。」

とあるだけで、七山の記事は含まれてゐない。

然りとすれば、物語の方も、同様正徳三月以降で、しかも零本よりも後の執筆と見なさなくてはならぬことになる。従つて、物語の執筆時につき旧著において、「その執筆時も宝永六年である」とは間違ないとしても、オランダ人との才一回会談以後に加筆するところがあつたと認めなくてはならないことになる。云々（白石の研究）と述べたことは、再検討を迫られるわけである。因みに旧著で、物語を宝永六年の善述と認めた理由は、前述の乙丑、実は己丑の文字のほか、本書の別

名が「シドナ訃問覽」とあることに由る（翻註ニ）。ところで、零本を一わたり見て感ぜられるのは、物語に比べれば不備であるとはいへ、明かにメモではなくて一箇のまとまった編著としての体裁をそなへてゐるといふ点である。とすれば將軍家宣在世中の、宝永七年から正徳二年にかけての時期のとき、白石の身辺多忙をきはめた時期の執筆としてはふさはしくないと思はれることである（この頃は日記でさへも代筆させてゐる部分が多いと推測される位である）。（いま宝永六年を多忙の期間から外したのは、シドナの訃問が此の年の十二月までかかつてゐて、執筆の時期としては不適當と認められるからである）これまた旧著で述べた通り、西洋紀聞執筆の動機は、主としてシドナの死に遭遇したことにあつたと推測されるのであるが（白石の研究）、思ふにこの動機は、そのまま該零本の場合にも当はまるのではないからうか。それは、本書が紀聞の初稿であるにふさはしい形態内容をもつてゐるからである。實際シドナの死は、白石にとって忘れがたい事件であ

つたらしいことは、後年ではあるが、如賀の小瀬復庵に対し

「かのもの死し候は、正徳四年十月廿一日の夜に候き。某へ物語之事共を以て推し候へば、四十七歳の積にて候き。」（白石全集五）

と書き送り、年時時刻と行年とを明記してゐること、また水戸の安積澹泊にむかつて

「還馬人に度々出合候事、凡そ一生の奇会たるべく候」（同上）

と告白したこと等がそれを示す。

西洋紀聞の起稿については、旧著において、時恰も改貨事業遂行の最終段階にあつて、白石は全智能をこれに傾けてゐた時であるから、筆をとること叶はず、翌年に延び二月に至つて閑暇を得て起稿することになつたのであらう」としたが（白石の研究）、この二月といふ時点は、現行本上巻附録末の識語「正徳五年乙未二月中辭」が手がかりとなることいふまでもない。身見では、紀聞が一応完結したのは正徳六年、即ち享保元年中のことと思はれるので——享保二年には既に現行本

に近い形の三冊本が存在してゐた（同社頁二）——二月に起稿したとすれば（「二月中漸」は一座の目安で、これより前であつても差支へないことである）完結までに二年ばかりの日子があつたことになつて、何等の無理をも伴はない。かやうに推考するならば、該零本の執筆時は、正徳五年中の、しかもはやい頃と推定することが可能となるであらう。但しこれは決定論ではなく、あくまでも前述のごとき假定に立つての推論である。

ここで思ひ浮ぶのは、既述の「是歳乙丑」の文字である。この乙が己の誤りであることは勿論として、己を乙と語記したことには何かの理由がなくてはならない。この乙は、或は正徳五年の乙未に關係があるのでなからうか。一案としてここに附記する。

三 零本ならびに物語と紀聞

零本と物語とが、対応する部分においては僅少の相違を除きほぼ同一内容のものであることが判

明した以上、二者は一括して取扱ふのが妥当であらうから、今この二本と西洋紀聞とを対比することにより、紀聞成立の向題を改めて考察したいと思ふ。

物語と紀聞との關係については、旧著において白石のキリシタン観の進展といふ角度から一通り考察を加へたことであるが、今その要点を抽出すると、(Ⅰ)テウス・(Ⅱ)エイヌス・(Ⅲ)マリヤ及び十二使徒・(Ⅳ)ローマ教会の成立と伝統・(Ⅴ)ローマ法五斤の職制と教科科目(附)世界諸宗教、これら諸項目のいづれにおいても紀聞には発展の迹がはつきり認められるのであつて、例へば(Ⅴ)のエイヌスの項においては、物語は、名義の説明から始まつて、①出生・②命名・③天主の子の自称・④布教活動・⑤弟子たち・⑥新罪処刑・⑦復活と説法・⑧昇天等について簡略に記すが、それが紀聞になると①から⑧までについて見ても、それぞれ記事が詳細であるほか、物語には見えないイエス以前の事——白石のいはゆるアタンとエワ・ノエ(ノアン・モイビス(ハモーゼ)等の説明があり、また贖罪、

のことが述べられてゐる。とくに贖罪はキリスト教において極めて重大な意味をもつものであるから、此の増補は頗る注目に値するものといへやう（白石の「研究」三頁）。それならば、物語と紀聞とにおける記述説明の相違は、どうして現はれたのであらうか。その理由として考へられる才一は、先行の排邪書との接触により知識がなまり認識が深くなったこと、才二は、囚禁後のシドネから不明の点をききただし正確詳細な知識をもつに至ったこと、才三、オランタ商館長等との会談、才四、上記のいづれとも関連をもつものであるが、旧知識の消化と活用、等である。これらの中、才四について少しく説明すると、白石のキリシタン認識ならびに海外知識は、主としてシドネおよびオランタ人からの聴取に基くものであるから、基本的な問題や事柄については量的には増減があるわけではないのであるが、後日その認識が進むに伴ひ、今までは不消化のために眠つてゐた知識が後に増補を行つた際、消化され活用されるに至つたと思はれることがそれである（同上五頁）。

以上は旧著において述べたところであるが、上記理由のうち、才二の囚禁後におけるシドネからの追加聴取は、零本及び物語の執筆をシドネ死後と假定する本稿の立場からは無意味となり、才三のオランタ人との会談の成果も、すでに零本・物語の中にはきり投影してゐるわけであるから、残る二つの理由が改めて問題とされなくてはならなくなる。しかして、才一のもものは旧著で詳しく論証したことで、今ここで修正の必要は認めないから、結局才四の理由が問題であるが、零本から物語、物語から紀聞へと書き改められて行く過程を時間的に見ると、上述の通り前二者と紀聞との間には甚だしい時間の隔りがあるとも考へられただけに、疑問が生じないではない。既述の通り紀聞の完稿は正徳六・享保元年のことと考へられるから（定本となつたのは享保九・十年の頃と思はれる「同上」二頁）、起稿から二年足らずの間に書き上げられたとすれば、僅かな期間に白石のキリシタン認識が急速に進むのはをかしいではないか、といふことになるのであるが、これについて

は以下のごとく解釈することが出来るやうに思ふ。オ一には零本・物語の起稿執筆当初と紀聞の執筆開始との間において、白石の意図・構想上、変化が生じたこと、オ二は、さういふ意図・構想の變化、即ちかなり大掛りで体系的な著述の意図が記述を全体的に詳細たらしめたこと（但し、零本・物語の方にあつて紀聞では姿を消した説明がないではない⁴）。これなどは、著述の意図や構成の關係資料の取捨が行はれることが一般であることと思へば、何ら不思議はないであらう。オ三は、その詳細で本格的な著述の間に白石の学者的態度が次々に強く出てきて、手持のあらゆる資料を綜合活用し、自己の知識に再検討を加へた結果、急速に脱皮して紀聞に見られることと見事な敘述となつたこと、等である。

これも田舎で物語と深いつながりのあることを指摘した將軍家宣への上書（珀砵の研究）——シド子取調後までもなく將軍に上呈した謂はゆる「天主教大意」を見ると、白石のキリシタン觀はほぼ其の骨幹が出来上つてゐたといふ感じがするので、

紀聞と比較して見ても、其の基本線は変わらないといつてよいであらう。即ち、その理解は仏教を媒介とするもので、兩者の類似と地域の近接とを根柢としてキリシタンを仏教の亜流と見なすのをはじめ、テウス・エイスマスの性質、ローマ法王方の地位、布教活動の实体等々、上書に盛り入れた内容は、その表現の生硬を別とすれば、紀聞の記述と本質的には径庭はないといへるのである。なるほど、それより数年を経た後においては、オランタ人から新たに聴取したり、或ひは参考書を見直したりすることにより、白石の認識が細部においては次第に精確となりえたことは否めないにしても、兩者の間に甚だしい質的差異が生じたとは認めがたいのである。但し、すでにことはつた通り、紀聞の完成は最晩年の享保九年もしくは十年のことと考へられるから、現存の自筆本が生れるまでの間に、更に一層その認識が深まつたとする考察を全く否定しようとするものではない。

むすび

以上三節にわたって零本ヨハンバッテイスタ物語の内容・執筆年時、ヨハンバッテイスタ物語および西洋紀聞との関係につき考察を加へた結果、零本は物語（現行本）に比べれば、量的にはその一部分に該当するに過ぎないが、原初的形態をよくとどめてゐるの及ならず、自筆本であるだけにその字句においては物語よりも正確さを示すものがあることが明かとなつた。しかして、執筆年時については断定はできないが「オランダ人の説」が引照されてゐるところから判断して、少くとも正徳二年二月以後に属し、現存の自筆メモを手がかりとする時には、才三回目の会谈―正徳四年三月以降に書かれたものと考へられ、さらに白石その人の身辺の状況に照らして執筆の動機を探る時には、シドチの死以後と見るべく、おそらくは正徳五年二月に達からぬ時期と推定するのが妥当であらうことを述べた。

今この稿を了へるに当り、幾つか弁見を附記し

ておきたい。その一つは、シドチおよびオランダ人からの馳ぎ書である部分についてであるが、その表現記述が白石流になつてゐるといふことである。これは記録をそのままに引写すのとは異なり殆んどの場合に生じ得る現象で、ましてそれが異国人の間で行はれる場合には、かかる現象は当然すぎることであらうが、それでもやはり興味をひくものがある。例へば、イエスについて「ぬつから抹して一世界の主と算するを以て世」と敘し、或はキリスト教のヨーロッパ各地への流伝につき「國王宰官より始て、その下人非人に至る迄、皆その法を信受奉行せすといふ事なく」と記してゐる事などがそれである。しかしこれらの表現はまだ程度の軽い方で、前引物語Ⅴの文章中、

「およそ一世界は東より始れり。その始れる所の国にして其国は小しき世といへとも、其人物も風俗も万国の中にすくれしか故也」

に対応する西洋紀聞の次の一節（シドチの日本讚美）のごときは、全く儒學者白石の表現になりきつてゐるといへるであらう。

「天地の気、歳旦の運、万物の生、ことごとく皆東方より始らずといふ事なく、万国の中、東方に因せしもの、此土の外には、黒子ばかりの地もあらず。さらば、此土の万国にこそすぐれしは、我また多言を費やすにおよぶべからず」周知の通り、ヨーロッパ地域においては、はやく「光は東方より」といふ觀念が生れてをり、また後世においても *Morgen Land*—東洋、*Abend Land*—西洋の如き表現がとられてゐることなどから推して、此の場合、儒教にいはゆる東方始元の考へ方と一致する表現がシドナによってなされたであらうことは疑ひないが、物語の「およそ一世界は東より始まれり」といふ記事もほぼ信頼できよう、右の表現はやはり白石流といふべきであらう。

その二は、白石の西洋認識に關すること、一方には前述の通り、キリシタンを以て仏教の垂流と考へたやうな誤解や、或はまた餘りにも有名な「所謂形而下なるものゝみを知りて、形而上なるものは、いまだあづかり聞かず」といふやうな偏見もあるが、しかしながら概していへば、白石に

おいては西洋蔑視の態度は比較的稀薄であり、とくにシドナ觀・オランタ人觀についていへば、むしろ尊重の念を抱いてゐたことが看取されるのである。これはやはり白石が豊富な海外知識をもちえたことの結果であらうが、例へば零本にマリヤにつき、「その母マリヤは六十三歳にして上天せり」とあるその寿命など、白石以後、蘭学が普及するに至る時期においてさへも、儒者の間に、ヨーロッパ人は短命で五十以上の寿命をたもつものがないといふやうな認識があつたのに比べれば、既にさういふ偏見を免かれ得てゐたであらうことを思はしめられる。(傍証として小瀬復庵の手紙——白石からの聴書——があるが、それには、オランタ人の間では、七十八十の高齡者は珍らしくないことが記されている)シドナを評して「聖人ノ温良モカクヤ」と言つたとの伝へ(文会雜記)は有名であるが、オランタ人についても、四回も会谈してゐる位であるから、その觀察および認識はかなり深かつたやうで、そのメモを見ても、彼等のすぐれた一面——命名法・戦法・厳正な軍規と

勇氣等——を知りえてゐたことが察知されるのである。⁸ またオランダを以て「おそろしき国」と述懐したことも、よく知られたところである。

その三は、白石が旧教側—カトリック信者としてのシドネ、新教側—プロテスタントとしてのオランダ人の双方から海外事情を聴取しえたこと、わけでもキリスト教につき双方からその説明をきえたことは、白石の知見を正確公平たらしめた理由として注目すべきところと思ふ。その状況は零本には片鱗しか現はれてゐないが、西洋紀聞になると隨所に見られるところである。⁹ かく利害の対立する異邦人々と面談するといふ幸運に恵まれたことは、何といつても白石が幕政に参与しえたからであつて、これが紀聞の學術書としての價值を高からしめてゐる最大の理由でもあらう。因みに、アダムとイヴについての知識なども——既述の通り此の事は零本には見えない——、オランダ・カピタンらとの才一回会談のメモにそれが書きつけられてゐることからすれば、これはオランダ人から得たものと思はれる。

その四は、零本の遺存についてで、これは白石の筆蹟が断簡零墨といへども珍重愛蔵されたことの実証といへやう。水戸の立原翠軒が、「余固欽白石先生之風、其遺文断簡、搜索竭力」といひ「白石先生遺文を蒐集纂したることなど其の通例であるが、また江戸五鬼の一人として著名な龜田鵬斎が、白石の筆蹟に題辭を附して軸物としたごとき事例もある。¹⁰ その他、近世後期においてはかういふ事例は珍らしくないことであるが、思ふにこれは、白石の儒學者としての學識・經綸の卓越性もさることながら、根本的には其の學究としての真摯な態度が後続の學者たちをして仰慕せしめたことによるものであらう。しかして、さういふ真摯な態度は、白石の一種の使命感——自分を措いてはそれをなし得る人間がゐないといふ自覺と自信とが、老骨に鞭うつて幾多不朽の著作を生み出させたものと思ふ。¹¹

註

①物語の此の乙丑は筆者の謄写本では己丑となつてゐることから、白石の研究においては此の事にふれ、鮎沢本との相違を指摘したことであつたが（註110）、零本には明かに乙丑とあり、また白石の自筆本（内閣文庫藏）にも乙丑とあることであるから、やはり物語の方も（粟田本）乙丑となつてゐるのであらう。己丑は私自身の誤写と思はれるので、今は鮎沢本の方に従ふことにする。この乙丑の誤記に因んで附記すべきは、零本・物語に共通の誤りと認められる「崇神天皇三十年」（「乙丑」と同一註内のもの）である。これも鮎沢氏の指摘されたところであるが、これは「垂仁天皇三十年」でなくてはならない。但し、鮎沢氏が物語の誤記とされたイエスの「時にその年三十三」の註のうち、「後漢光武帝建武八年」は零本では九年となつてゐて正しい。

②白石の研究——二四〇頁、或は拙稿「外国之爭調書について」——史學雜誌六六の四、七〇頁、参

照。

③『新井白石日記』（大日本古記録本）の解説——下巻二〇九頁、参看。

④零本および物語にあつて紀聞にないものとしては、（一）キリスト命名の割註のうち「此時、本朝人皇の初々七百四十二年の、ち……秋迦文の滅後一千餘年の、ち也」（零本）。「此年ハ。本朝人皇の始より……秋迦文の滅後一千餘年の後也」（物語）、（二）同じくイエスについて「三十歳の時」（零）。「三十歳の時より」（物）、（三）イエスの昇天について「その、ちシナへといふ山の頂より」（零・物）等がある。

⑤打川堅固氏によれば、古代ローマ人が「光は東方より」（*Ex oriente lux*）といった場合の東方（*Oriens*）は、先進文化地方、即ち主としてギリシヤを指したのであるといふ（「東西交渉史上における現代日本」——東西交渉史論、所収）。

⑥津田左右吉博士『政略と國民思想の研究』才四卷、五〇七頁。これにおいて、白石はもとより、元禄前後の學者の言説には甚しく西洋人を

経度したり嫌悪したりしたやうな形跡は見えないやうであるが、蘭字出現以後、却つて西洋人夷狄觀が固定したことを指摘された点は、注意すべきところであらう。

⑦津田同上書において、当時の知識人の中心勢力たる儒者の誤つた西洋人觀の一例として、五十以上の寿のない詔が生み出されたことが述べられ、実例として大槻玄沢六十を賀する寿言の一つ「紅毛之人々老寿、得及五十比彭祖」(茶山)が引かれてゐる(五〇・六一七頁)。本文で述べた通り、白石にはさういふ謬見はなかつたと思ふのであるが、それを裏書するのは加賀藩医小瀬復庵の書簡で、それには白石の談話が次のごとく記されてゐる。「阿蘭陀は極北寒國に御座候。彼國人、南方ジヤガタラと申所へ出候て、……水上になれ不申候而、そのまゝいたみ候て、病人に罷成候故、短命のもの多御座候。彼國(本國材)に住着申候者は、七八十歳之人常に多御座候由申候」(白石全集五) この中に、ジヤガタラに出かけて行つた者が短命であ

ることを述べてゐるが、因みに、オランダ人からの聴書の一條に、ジヤワの土人が短命で、五十六十に至るのは大寿である、といふ記事がある(白石の研究―二四二頁・史学雜誌六六の四一七三頁、もしくは拙著新井白石―一五九頁、参照)。

⑧命名法―「名の事多クハ親族の内、賢人の名をとりて付ク」云々(研究二九二・三頁上段⑥)、雜誌六九頁の14・戦法―「軍の法次才ニ巧になりて」云々(研究三二七頁の15・雜誌六九頁の15)・嚴正な軍規と勇氣―「騎馬老人鉄炮ニ挺」云々(同上16・同上16)・その他、軍隊の精銳を述べたものには、「水陸の軍いづれをまさり」云々がある(同上17・同上17)。因みに新井家に現存する「外國人圖」中に、オランダ人の男女一対の圖が含まれてゐる(拙書『定本折たく柴の記釈義』の図版七、参看)。

⑨此の状況については、旧著中、紀聞と外國之事調書との關係を考察した箇所においてかなり詳細に論述した(白石の研究、二三三・二五六頁

）。

⑩「人ノ始アミム男ノ始エイハ女ノ始」前掲
拙稿、参照（史学雑誌六九頁の2）。

⑪栗田元次氏「新月白石の文治政治」五一―二頁
参照。

⑫晩年の白石の学究的生活については、前掲（註
8）拙著、釈義において詳述した（五九―六
〇七頁）。

（附記）

零本の披見、複写撮影、さらには本誌への掲載
載につぎ便宜と承認とをたまはった早稻田大学
の御好意に対し、先づ厚く御礼申し上げます。

次に、本稿執筆の向、終始念頭を去りなかつ
たのは、先年物故された名古屋大学の栗田元次
教授と、本年五月他界された横浜市立大学の鮎
沢信太郎教授、お二人のことである。本文で述
べた通り私の所持するヨハンバッティスタ物語
は、栗田本から直かに写したものであるが、教
授の御宅をお訪ねして（去る二十九年）限られ

た時間内で写させていただいた為、半分に止ま
らざるを得なかった。その時の御款待は今以て
忘れがたいが、ただ、遠来同好の士と認められ
てか、弱輩の私をつかまへては種々お話を始め
られるため、しばしば筆写を中止せざるを得ず、
残念ながら未完のままとなった。その後再度に
わたって御遺宅に参上したが、該宅本は見当り
ないとの御話で、未だに残り二章の書写を果し
得ないである。ところが、それから向もなく既
述の鮎沢教授の紹介文（『正史教育』）に接し得た
ことから、原本の借覽をお願いしたところ快諾
され、わざわざお送り下さった。これが栗田本
のまた写しであることは、本文で述べた通りで、
多少の欠点はあるが、しかし筆者の写本の不備
がこれによって救はれたことは争はれない。教
授とは幽冥境を異にする今日、すぎし日の御懇
情を思つて感慨甚だ切なるものがある。ここに
改めて感謝を捧げると共に、併せて御冥福をお
祈りしてやまない。

